

胃瘻チューブ交換時に生じた腹腔内誤挿入に 対して行ったチューブ再挿入の経験



ふきあげ内科胃腸科クリニック

院長 蟹江治郎



目的

PEGカテーテル交換時の誤挿入に対し、
内視鏡操作を用いて既存の瘻孔より
再挿入を行うことにより、
外来処置のみで対処が可能であった
事例を2例経験したため報告する。

症 例



症例①

53歳 男性 脊髄小脳変性症にてPEG施行
他院にて在宅管理を受けている

症例②

72歳 女性 脳梗塞後遺症のためPEG施行
他院にて在宅管理を受けている



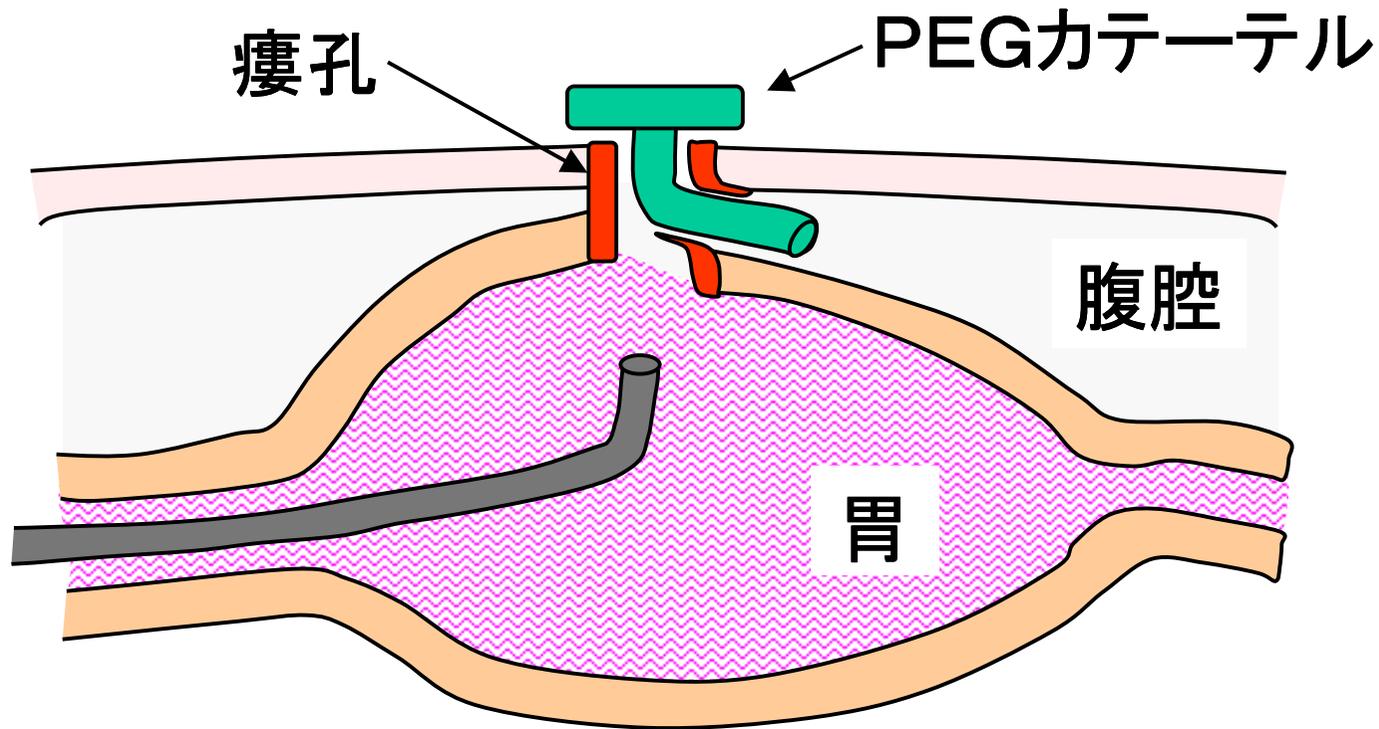
PEGカテーテル定期交換の際、
持続する強い疼痛とチューブ可動性の低下があり、
誤挿入の疑いにて当院へコンサルト



緊急内視鏡にて誤挿入を確認後、再挿入を実施



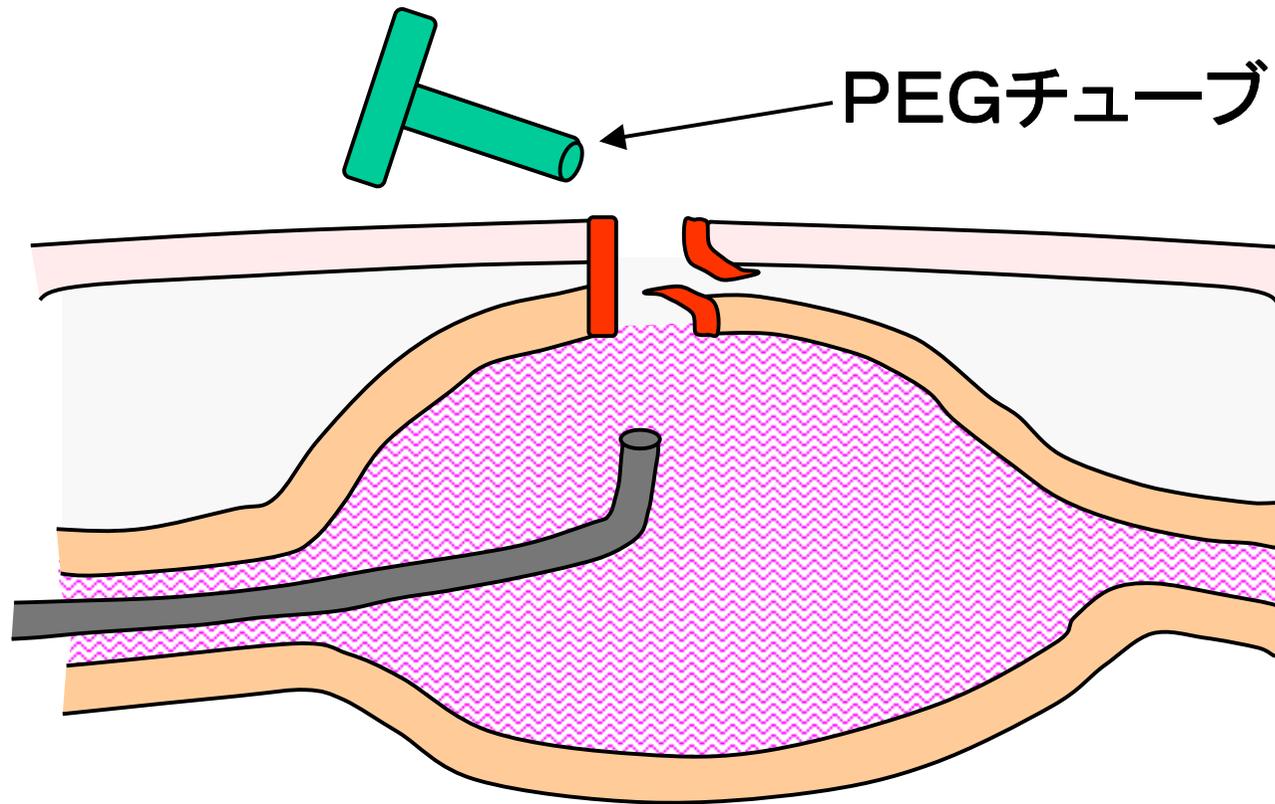
誤挿入されたカテーテル



内視鏡を利用して瘻孔部を確認



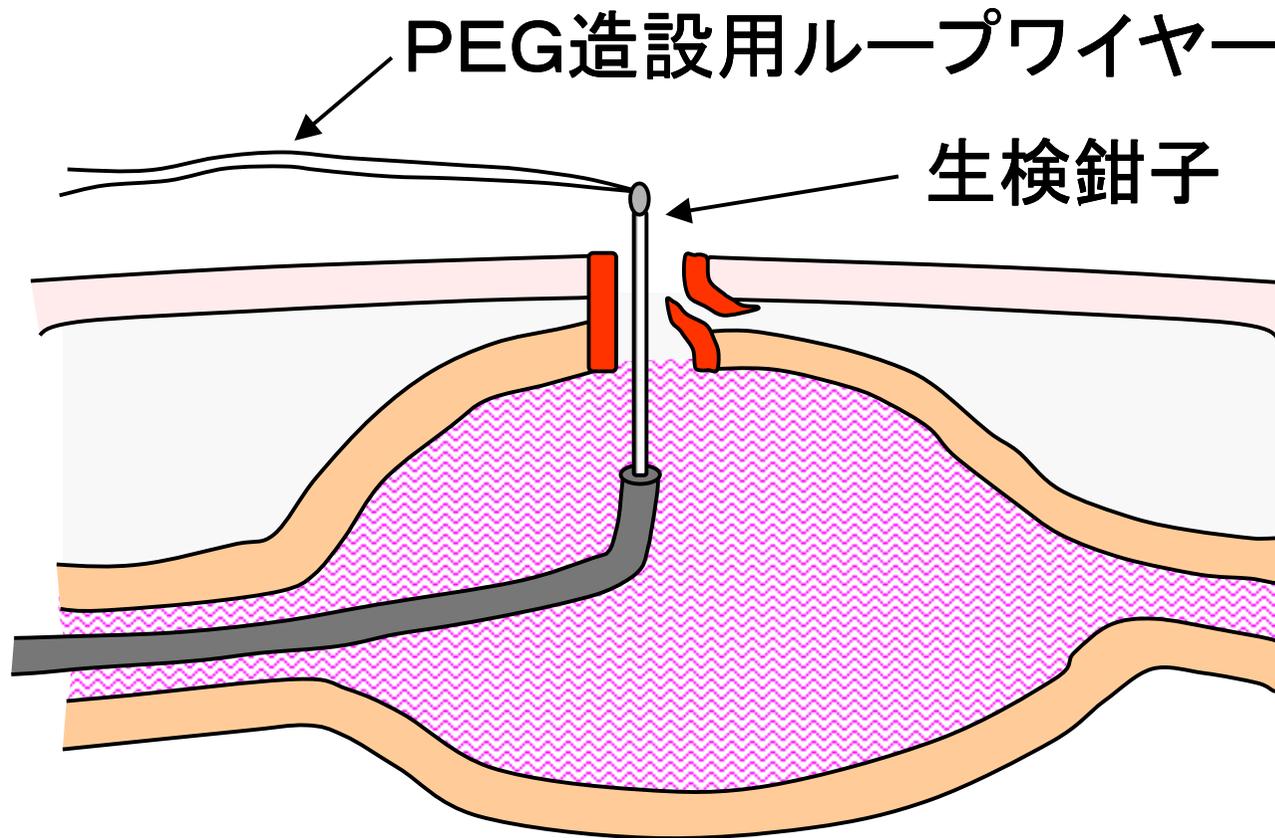
内視鏡で誤挿入を確認後に抜去



誤挿入が確認されるまで抜去は行わず、
内視鏡で確実に確認した後にカテーテルを抜去



生検鉗子によるワイヤーの把持



瘻孔部分から慎重に生検鉗子を挿入して、
先端を体表面に出しPEG用ループワイヤーを把持。

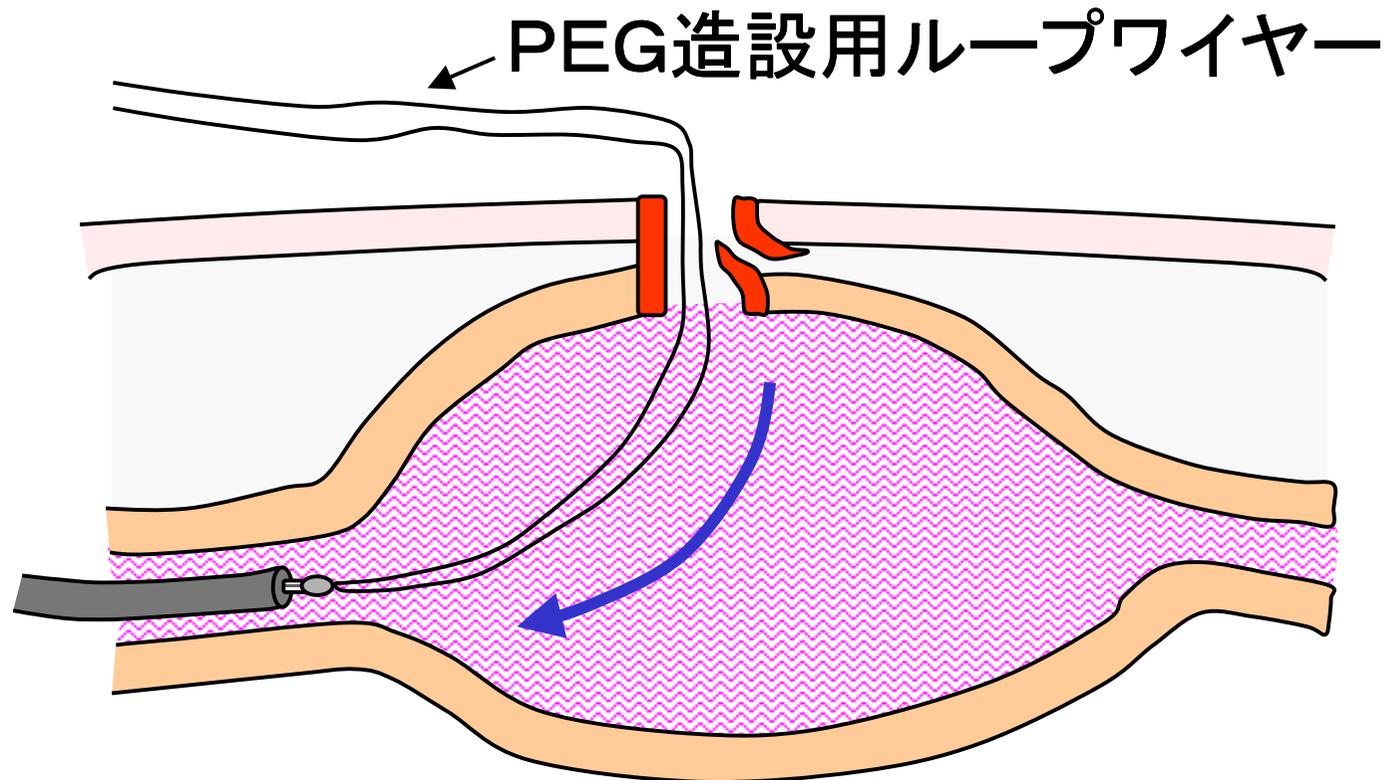


生検鉗子によるワイヤーの把持





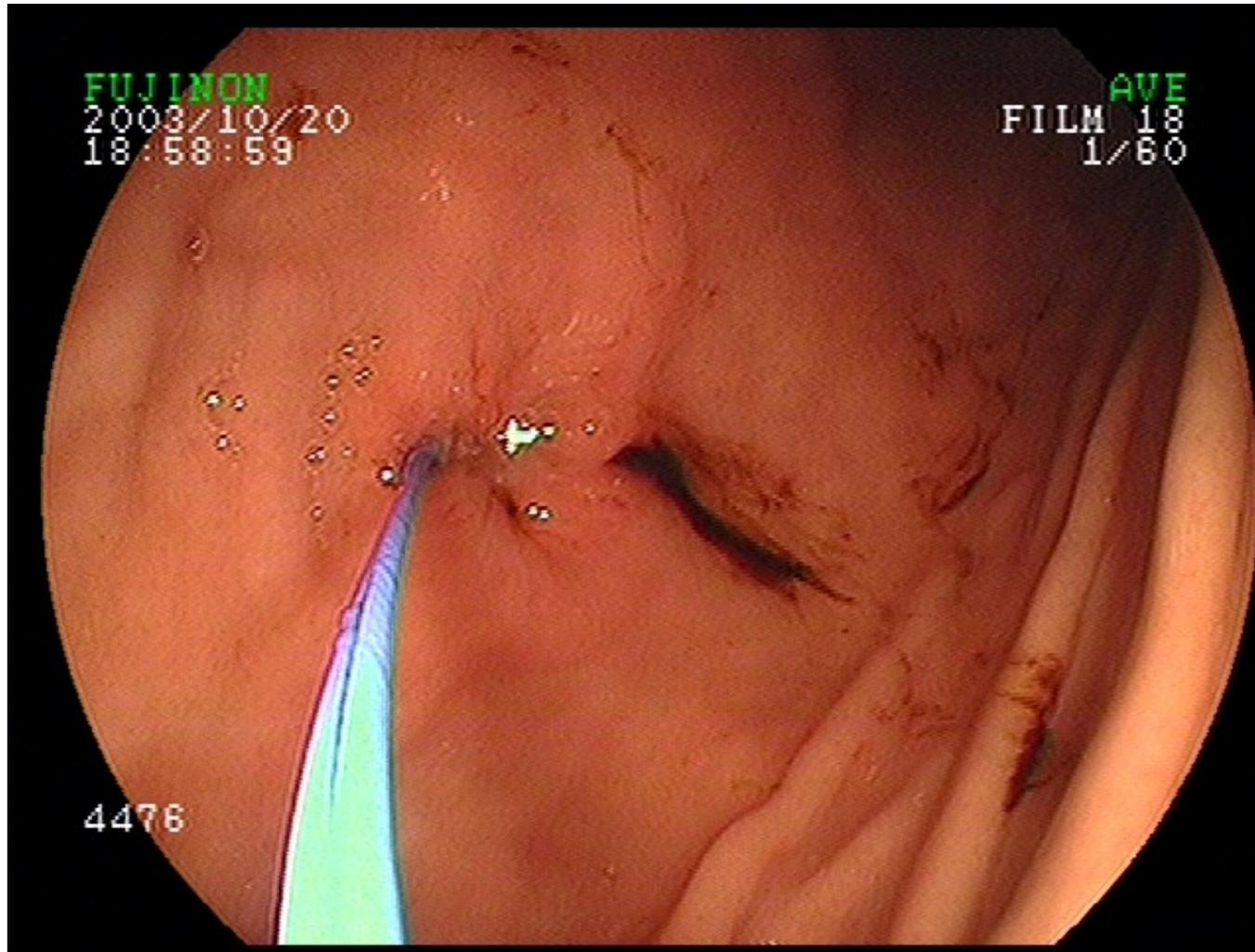
口腔を経由したワイヤーの誘導



ループワイヤーを把持しつつ内視鏡を抜去することにより、
破損穿孔した瘻孔を経由し、口腔より体外へ誘導する。

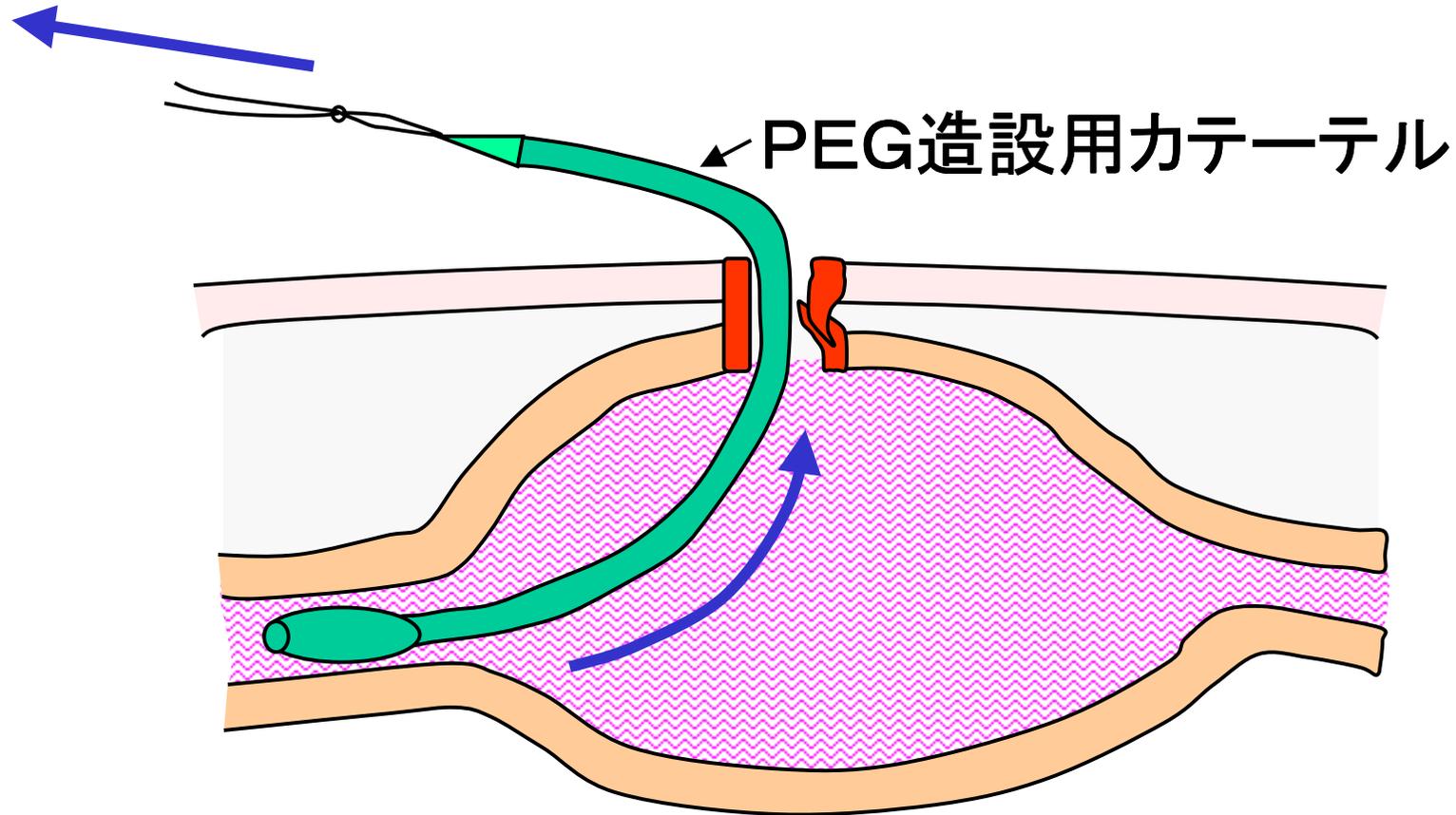


口腔を経由したワイヤーの導出





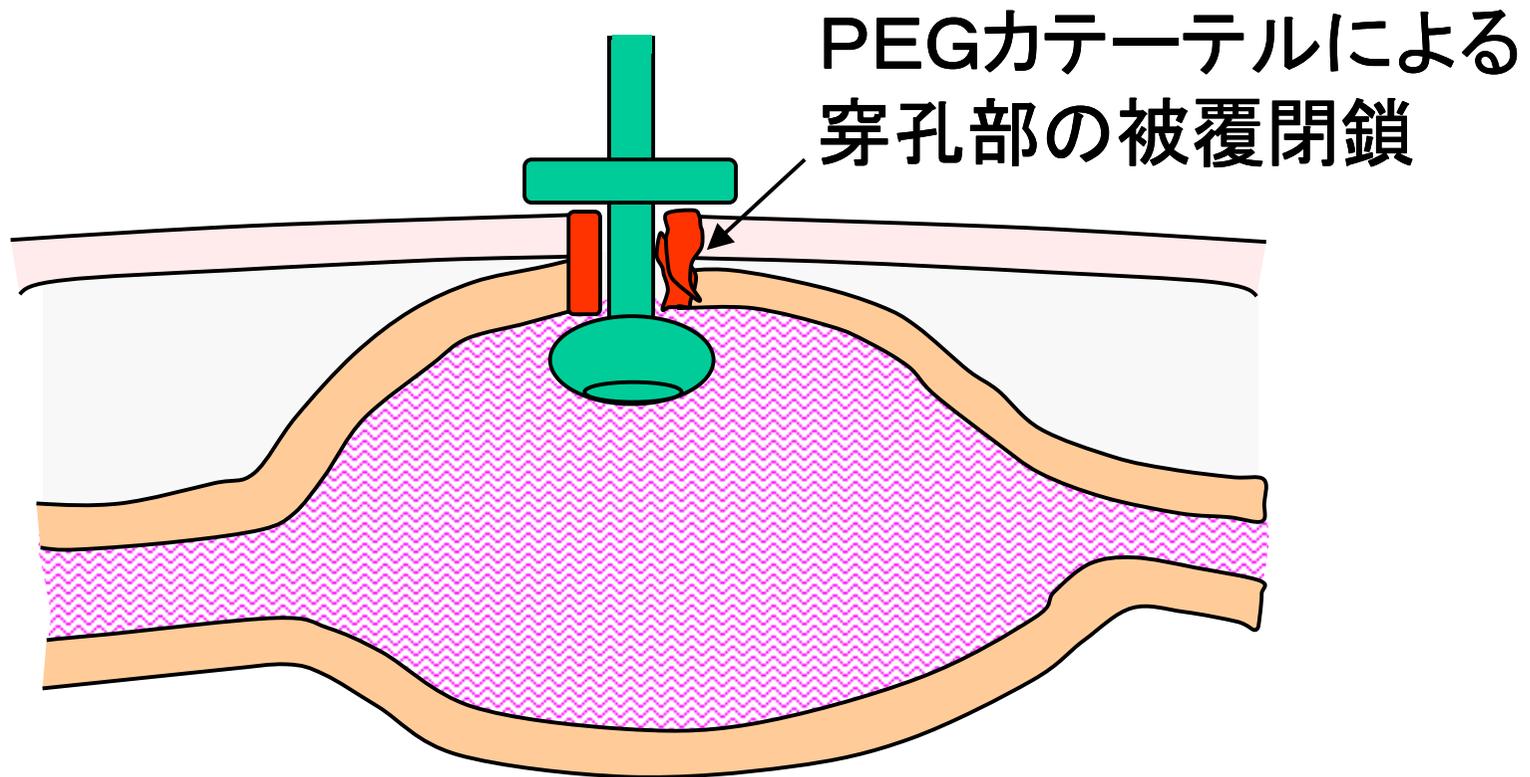
PEG造設用カテーテルの挿入



口腔へ誘導したループワイヤーとPEG造設用カテーテルを結紮し、ガイドワイヤーの牽引を行うに事によりカテーテルを挿入



カテーテルの設置と穿孔部の閉鎖



PEGカテーテルは胃内減圧用チューブとして利用



結 果

- 在宅管理を行っている2症例に本法を施行した.
- この手技により瘻孔の破壊穿破部は胃瘻チューブにより被覆閉鎖され, 同時に胃瘻チューブによる胃内減圧も行う事により, 胃内容物の腹腔への流出を回避して汎発性腹膜炎の発生を防止し得た.
- 本法により, 診療所間の連携により入院治療を行うことなく在宅診療の継続が可能であった.



結語

- 胃瘻チューブ腹腔内誤挿入を、
診々連携と無床診療所による内視鏡処置により、
入院治療を行うことなく対処が可能であった。
- 今回我々が行った方法を用いれば、
入院患者のみならず在宅患者においても、
より簡便で低侵襲の方法で再留置が
可能であるものと考える。